

『ぼくのドン・キホーテ』

ホセ・マリア・ブラサ著

評者 坂東 省次

スペインの生んだ世界的名作『ドン・キホーテ』は、前編と後編からなる。前編が刊行されたのは、1605年のこと。昨年、刊行から数えて4百年目を迎えた。スペインは国をあげて『ドン・キホーテ』刊行4百周年を祝い、さまざまな記念行事が開催された。全国の本屋の店頭には、特別コーナーが設けられ、さまざまな『ドン・キホーテ』が所狭しと並べられていた。2005年のスペインは、まさに『ドン・キホーテ』一色であった。

2004年5月、著者のブラサ氏が来日を機会に入洛された。御所の近くのとあるホテルの和風レストランで夕食をした際、新しい『ドン・キホーテ』を書いているというので、出版をすすめるとともに、日本での翻訳出版も約束して別れた。

元新聞記者の著者は『ドン・キホーテ』出版後も、コロンブス、ザビエル、と次々に名作を発表している。とにかく速筆だ。

『ぼくのドン・キホーテ』は約束通り翌2005年に刊行され、刊行4百年記念に助けられて版を大いに重ねた。昨年は『ドン・キホーテ』が50種類も刊行されたという。そんな中でベストセラーの栄冠を勝ち取ったのは、本書の原典 *Mi primer Quijote* 『ぼくのドン・キホーテ前編』であった。

著者は本書のなかで、作者ミゲル・デ・セルバンテス（1549 - 1616）を、「世界で一番の小説家」と呼んでいる。数年前にノルウエーのノーベル研究所と愛書家団体が行った、「史上最高の文学百選」のアンケートの結果、『ドン・キホーテ』が堂々の第一位を占めた。『ドン・キホーテ』は世界一の小説家が書いた世界一の小説ということになる。しかしながら、前編・後編あわせて4百字詰原稿用紙3千枚をこす長編である。スペインでも名前は知っているも読了している者は少ない。日本では推して知るべしである。

著者は「最後に（遅ればせの序言）」をこう始めている。「この本を読み終えた閑暇な読者よ。ひとつの理由から、ぼくは『ドン・キホーテ前編』を書きかえた。それは、世界文学史上燦然と輝く、セルバンテスの偉大な小説に、あなたが近づきやすくなるように、新たな扉を開くということだ。」

著者はあらすじをほとんど変えず、章立てもオリジナルと同じようにしながら、著者らしい味付けをして長編を短篇に書きかえた。例えば、17世紀初頭当時の小説は、まだ草創期にあり、描写はひじょうに簡潔で、対話ばかりが写実的で生き生きとしていた。著者は、対話は現在の表現により近く、描写は大胆に誇張して書きかえている。こうして著者はセルバンテスが大切にした、創造に関する自由を行使して、読者の心に留まるような、親しみの湧く作品を完成したのである。

『ドン・キホーテ』が書かれた時代、読み書きのできる人は2割程度であったという。その他の人々は文字の読める人が読むのを聞いて楽しんでいたのだ。セルバンテスはそのような状況を考慮に入れて名作を書いたとも言える。従って、『ドン・キホーテ』という作品は黙読もいいが、一度は声を出して読んでほしい作品なのである。そうすることで楽しさも倍増するのではないだろうか。

ところで6月初旬、本書の出版を記念して来日した著者ブラサ氏と京都で再会した。話の中で後編のことが話題にのぼった。*Mi segundo Quijote* 『ぼくのドン・キホーテ後編』はいつ出すのかと尋ねると、10年後の1615年つまり『ドン・キホーテ』後編刊行4百年記念の年に出したいと即答していた。今回の「前編」のベストセラーで気をよくしたブラサ氏は、10年後にもう一度ベストセラーを狙っている様子であった。訳者は「訳者あとがき」で、『ぼくのドン・キホーテ』は、ホセ・マリア・ブラサの21世紀版『ドン・キホーテ』と言っているが、後編が出れば、正真正銘の21世紀版『ドン・キホーテ』になること間違いなしである。その日を今から楽しみに待ちたい。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）